

おじいちゃんと夏帽子

福岡県 福岡海星女子学院附属小学校 四年

渡辺 わたなべ 沙耶香 さやか

「明日から、そこに置いている夏帽子をかぶって行きなさい。もう、すぐかぶれなくなるんだから。」と、プツプツ言いながらも、お母さんは新しい夏帽子を用意してくれていました。

この真っ白な夏帽子を見ると、去年亡くなったおじいちゃんのことを思い出します。私のきおくにあるおじいちゃん、すでに病院に入院をしていました。

「脳こうそく」のこういしょうが残り、元気な姿を見せるために、毎日リハビリをがんばっていました。

去年の夏、学校の夏の制服と帽子をかぶり病室に行くと、「おお、沙耶香」と、手をいっばいに出してむかえてくれました。

おじいちゃんは、さん素マスクを自分でとると、

「それ、学校の帽子か」と聞いたので、

「うん。」と私がうなずくと、

「よくあつている。」と、おじいちゃんは言ってくれました。

細くなつてしまったおじいちゃんの手を見ると、指先を優しくにぎることしかできませんでした。そしておじいちゃんは、長い間、私の姿をじーっと見つめていました。

時間ができたたびに、おじいちゃんに会いに、何度も病院に行きました。

会うたびに、元気になつていくように思えて、「次はお母さんだけで、行つてきてよ。」と言つてしまうこともありました。すると、

「ダメ、あなたもきなさい。」と言つたお母さんの強い言葉が、今でも耳に残っています。

長い病院生活から家に帰ってきたおじいちゃんは、ただねむっているかのような、とてもおだやかなお顔をしていました。

近くには、制服に制帽をかぶり、けい礼をしているおじいちゃんの写真が、かざつてありました。

あの時、病院で私の制服姿をじーっと見ていた時、元気で働いていた時のことを、思い出していたのかもしれない。

一緒にすごせた時間の中で、

「ありがとう」と、私がおじいちゃんにきちんと伝えることができていたのか、自信はありません。

でも、ひとつ言えることは、

「おじいちゃんの姿は、見えなくなつてしまったけれど、皆の心の中にはいます。」

今も、きっと私たち家族のそばで、見守つてくれていると思つています。